

ながさき山城・砦 探検魅力発信塾





塾長 山喜 邦次

■ 塾長コメント ■

まずは2年目も「山城」の活動を行わせて頂き感謝申し上げます。今年度は新たな塾生も入り、非常に意欲的に活動を行う事が出来たと感じています。来年度もまたさらにパワーアップして活動を継続していきたいと考えておりますので、何卒よろしくお願い致します。

1年間山城についての活動を行う中で、まだまだ地域に眠っている遺構や伝承がたくさん残っている事を実感しました。地域にとってそれらは大切な遺産であり、また継承していくべきものであるものと考えます。

来年度は地域の方々とより連携を取りながら、地域の歴史の探索と継承について取り組んでいきたいと思っております。

■ 塾の目的 ■

長崎県内の「歴史遺産」とも言える「中近世山城・砦」跡は現在分かっているだけでも約600か所以上、長崎市内だけでも約50か所も存在します。しかしそのほとんどは地域でも知られていないことが多く、忘れ去られ埋もれているのがほとんどの現状であると言えます。

長崎市内では、「鳥山城(西浦上地区)」、

「狭田城(江平地区)」、「武功山尾根突端砦(蛍茶屋近く)」、「桜馬場城(片淵)」、「日見城(日見地区)」、「茂木秋葉山砦(茂木地区)」、「俵石城(深堀町)」、「高浜城(高浜町)」、「福田城(福田本町)」等々の山城遺構が存在し、400年以上も前の姿を今も残しています。これらの山城はかつてその地域に存在した領主らの活動を示すものでもあります。

このように「埋もれた」歴史遺産とも言える山城にスポットを当てて探索、周知活動を行い、「山城」を新たな地域の魅力、まちあるき・観光資源の一つとすることを目的として塾活動を行っております。

■ 塾の研究・活動内容 ■

当塾では①山城や周辺地区の探索、②歴史についての文献調査・講師による研修会、③冊子、パンフレット、アクリルキーホルダーの作成等の活動を行いました。

①山城や周辺地区の探索

今年度は東長崎地区、南長崎地区、福田・柿泊・手熊地区、神浦地区、琴海地区、長崎市中心部「六丁町跡」の山城及び遺構を探索しました。

東長崎地区では「古賀地区まちづくり協議会」の渡邊一則様から地域の歴史についてお話をお伺いし、「日見城」「古賀館」「古賀城」「上戸石城」「満城」の探索を行いました。福田・柿泊・手熊地区では「NPO 法人21世紀夢倶楽部」鈴木律男様から実際に現地を案内して頂き、「宮尾城」「福田城」「キリシタン墓」等の探索を行いました。南長崎地区探索では「長崎石鍋記録会」東貴之様と一緒に現地を探索し、「高浜城」や深堀地区の探索、「俵石城」等の探索を行いました。

また、琴海地区では昨年に引き続き「形上地区まちづくり協議会」の方々と一緒に「舞

岳城」の探索会を行いました。



②歴史についての文献調査・講師による研修会

梅雨の時期や夏季は野外での活動が難しいため、座学を行いました。長崎市の山城については情報が少なく、「どじょう会」様の調査報告書をはじめ、郷土誌等様々な情報を集めました。また林隆弘先生からは「長崎市の山城について」山城の基本的な事柄から教えて頂き、とても貴重な研修会となりました。



③冊子、パンフレット、アクリルキーホルダーの作成

今年度行った探索活動をまとめた冊子、パンフレットの作成を行いました。当時の様子をわかりやすく示すために想像再現イラストを作成しています。

アクリルキーホルダーは、昨年度が長崎領主「長崎甚左衛門純景」であったため、今年度は深堀領主「深堀純賢」をキャラクターとして使用して作成しました。

■ 塾活動の成果 ■

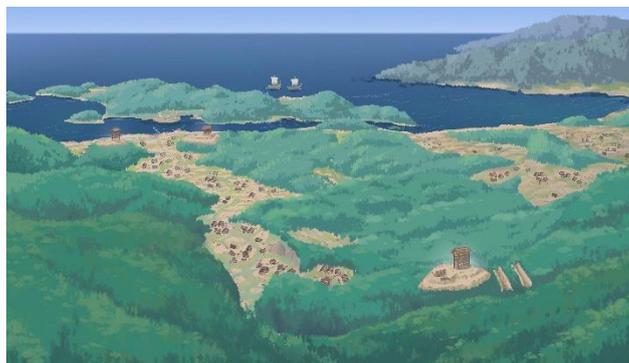
今年度も多くの地区と山城を探索することができました。また塾生の方々が非常に積極

的に参加され、一緒に山城の魅力を楽しむことができたのではないかと思います。

伝習所まつりではこれら山城の探索を通じてその魅力を長崎市内の方々に発信することができました。住んでいる地域の魅力を別の視点から再発見するきっかけになればと考えております。

山城の想像再現図については、より当時の様子を想像しやすいようにある程度俯瞰図として作成しました。現在ではなかなか予想できない当時の姿を知ることができますので、是非冊子の方をご覧ください。

↓戸石地区想像再現図



↓永禄8年(1565年)福田浦の戦い



長崎市内の山城遺構は知名度が低く、埋もれた歴史となりつつあります。しかし山城遺構は400年以上も前の当時の様子をそのまま残している貴重な遺構であり、実際に自分の目と足で確かめることができる大変ロマンのある遺構でもあります。地区の歴史遺構の一つとして是非、周知・保存・継承を行い、まちづくりの資源の一つとして残していくことができればと考えています。

ながさき山城・砦 探検魅力発信塾 活動記録

日 時	場 所	内 容
令和6年		
5月22日(水)	長崎市立図書館	第1回塾会議。
6月1日(土)	市民会館小会議室	「山城についての紹介」。
6月9日(日)	桜馬場城周辺	桜馬場城周辺探索会。
6月15日(土)	市民会館小会議室	探索報告、今後の探索スケジュールについて。
7月6日(土)	林隆弘先生 講演会	鳴滝高校教諭 林隆弘先生を招いて山城について講演会。
7月20日(土)	市民会館小会議室	「松浦党」についての勉強会。探索について打ち合わせ。
7月28日(日)	「県庁跡地～勝山町」	「県庁跡地～勝山町」探索会。
8月2日(金)	三川町周辺	「鳥山城」が位置する三川町周辺の遺構を探索。
8月3日(土)	長崎市立図書館	日見城についての情報収集。
8月17日(土)	市民会館小会議室	探索振り返り。
9月7日(土)	市民会館小会議室	福田城関連資料について勉強
9月8日(日)	日見城	日見城探索会
9月28日(土)	アマランス会議室	探索振り返り。福田、手熊、柿泊地区探索打ち合わせ。
9月29日(日)	福田地区	福田城と福田地区の探索会。
10月12日(土)	市民会館小会議室	探索振り返り。
10月13日(日)	手熊、柿泊地区	宮尾城、館山、キリシタン墓碑等探索。
10月26日(土)	市民会館小会議室	探索振り返り。
11月2日(土)	市民会館小会議室	東長崎地区の歴史について勉強会
11月10日(日)	神浦地区	神浦城、大城、田中城等探索会。
11月16日(土)	鷹ノ巣石鍋製作所跡	鷹ノ巣石鍋製作所跡 探索会。
11月16日(土)	市立図書館会議室	探索振り返り。
11月24日(日)	戸石地区	上戸石城、満城、戸石の六地藏塔等探索会。
12月7日(土)	市民会館小会議室	探索報告。南長崎地区探索打ち合わせ。

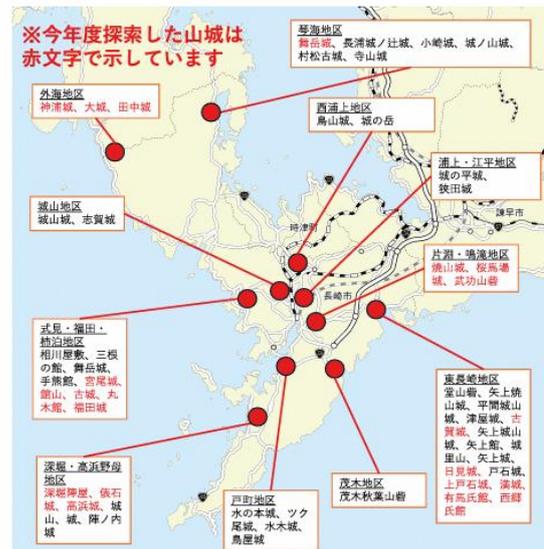
日 時	場 所	内 容
12月8日(日)	深堀地区、高浜城	深堀地区、高浜城探索会。
12月15日(日)	古賀地区	古賀地区探索会。
12月22日(日)	俵石城	俵石城探索会。
令和7年		
1月12日(日)	サステナプラザ	エコ講座、伝習所まつり・来年度の活動について。
1月19日(日)	舞岳城(形上町)	舞岳城探索会。
1月25日(土)	市民会館小会議室	伝習所まつり打ち合わせ。
1月26日(日)	サステナプラザ	伝習所まつり打ち合わせ。
2月1日(土)	市民会館会議室	伝習所まつり打ち合わせ。
2月16日(日)	サステナプラザ及び zoom	伝習所まつり打ち合わせ。
3月1日(土)	市民会館小会議室	伝習所まつり打ち合わせ。
3月15日(土)	ベルナード観光通り	伝習所まつり



長崎市の山城について

長崎市内だけでも、約50城もの山城が築かれています。その多くは築城主、年代が不明ですが、長崎開港以前からの歴史を雄弁に語るものでもあります。またその多くは海岸付近に築かれており、海上交易・交通が盛んであった事を示唆するものとなっています。

長崎市内の山城マップ



参考：長崎県中近世城跡分布調査報告書(長崎県教育委員会2011年編集)

はじめに

「ながさき山城・砦 探検魅力発信塾」とは？

長崎には長崎開港以前からも面白い歴史がたくさんあります。山歩き好き、歴史好き、長崎好きなメンバーであちこち探検、山城を巡り歩き、中世以前の長崎の歴史を深掘りしています！



「山城」とは？

山城(やまじろ)とは、険阻な山の頂上部や山麓部に築かれた城の一種です。土を掘って「空堀」としたり堤防を築いて「土塁」としたり、敵の侵入を阻むための仕掛けを現在でも確認する事ができます。



「天守閣」はない？

「お城」と言うと、立派な天守閣や櫓があるようなものを想像するかもしれませんが、「山城」の多くは土や石を使って防御機能を持たせた「要塞」のようなイメージです。実際に城主が居住している場合もありましたが、その多くは合戦の際砦として用いられ、領地の境界を見張る等の役割を担っていました。

山城には土地所有者の方がおられます。ゴミのポイ捨てや不法行為等、所有者の方の迷惑となる行動は絶対に控えてください。また山城については危険な場所も多いため、安全面については十分に配慮するようよろしくお願い致します。
※事故等の責任は負いかねます。

東長崎地区

古くは鎌倉末期から記録が見える「矢上氏」、南北朝時代の「空閑(こが)氏」といった、現在でも地名に残る領主が割拠していたとされる。長崎市内の中でも山城跡が密集している地域であり、また有力者の存在を示す石塔類の数も多い。

↓東長崎地区探索マップ



①日見城

日見城は昇町に位置する山城であり、西側は日見峠、東側は橋高側を見渡す事ができる(写真①)。長崎市街地及び矢上方面からの道が交わる場所に位置しており、また海に面していることから陸海交通の要衝であった事が窺える。

本丸跡は細長い山頂部にあり、その南西部には敵の侵入を阻む「二重堀切」(写真②)(堀切を連続して設けたもの)と土塁がある(写真③)。また城郭の海側には守備兵が待機する「常曲輪」を設けており、襲来に備えている。

戦国時代末期、深堀領主深堀純賢は長崎領主の長崎甚左衛門純景をしばしば攻撃した。日見城には両者の合戦の言い伝えが残っており、特に日見城上部の「高城山」では激戦に倒れた兵士の塚が建てられていたとの事。

② 戸石の六地藏塔

長崎市戸石町には「六地藏塔」と呼ばれる石塔が2基残っている。6体の地藏が一つの石塔に刻まれており、「佐賀型」と言われる。室町時代中期以降江戸時代前期にかけて流行したものであり、長崎県内でも諫早市の小野、小長井や松浦市等にてみられる。六地藏塔付近では宝篋印塔や五輪塔の一部も残っている。



③ 古賀城 ④ 古賀館

古賀城は現在の和仁会病院がある山に築かれていた。登ってみると意外に山頂部が広く、戦国期には有馬氏の陣地がおかれていたと伝えられている。和仁会病院が建設される前は、投石用の小石や城の抜け穴も見つかったとのこと。古い地名にも、「別当」「城ん迫」「城ん首」「籠」と残っている。

古賀館は現在のつつじが丘西部の先端に位置する。古い地名にも「館」と残っており、また南北朝期には在地領主として「空閑氏(古賀氏)」が存在した。当時古賀氏の妻(豊島氏)は戸石に領土を持っていたらしく、戸石から古賀へ抜ける途中の中畑地区を広く見渡せる場所に古賀館は位置する。



⑤ 福瑞寺

キリスト教が伝播した1570年代、古賀は有馬氏の領地であったとされ、積極的にキリスト教の布教が行われた。しかし慶長17年(1612年)幕府の禁教令後、キリシタンは根絶に功績のあった僧正哲を賞して本寺が寛永3年(1626年)に建立された。境内には花十字紋入りのキリシタン墓の他、緑泥片岩製の石塔が残っている。

また古賀小学校には大量の石塔碎々群が保管されている。



南長崎地区

長崎港より長崎市南部を見る



現在の長崎市南部には平安時代より開発領主であった「戸町氏」等が地頭として存在していた。しかし建長7年(1255年)、鎌倉幕府から地頭職を改易され、代わりに上総国御家人深堀五郎能仲が地頭職として任ぜられた。長崎市南部には深堀氏一族による堅固な城郭をはじめ、戸町氏や台場跡など多くの遺構が残存している。そのほとんどは海を意識して築かれている。

① 水本城

水本城は国分町〜戸町1丁目に位置しており、現在はマンションが建っている。長崎港へ張り出す形の地形であるために、湾を出入りする船の往來を見張ることが容易である。そのため、長崎港が重要性を増した戦国末期の城郭である印象を受ける。マンションが建つ地形は現在とは異なり紡錘形であったようで、山頂部には水子を祀った社があったという。



② ツク尾城

ツク尾城は水本城(大久保山)の尾根筋先に位置しており、数段の曲輪部が設けられた比較的小規模な砦跡である。水本城とセットで築かれているために城主と時期は同じである可能性が高いと思われる。ツク尾城からも海側を見渡す事は



⑥ 上戸石城

上戸石城は行仙岳の尾根先端部に位置しており、付近には「城仙」「城ノ谷」「陣ノ内」といった城郭に関連した地名が残っている。谷の奥に位置しているが、ちょうど戸石から古賀へ抜ける道の途中に位置していることから往來の監視の役割を持っていた印象を受けた。

城郭の山側には険しい二重堀切と石積を設けているが、城郭自体の面積は非常に狭い。南北朝時代(1334〜92)、九州の武士たちも北朝方、南朝方と分かれて戦った。戸石の地は矢上空閑民部三郎入道の妻「豊島氏」の所領であったが、南朝方についたために所領を没収された。かわりに深堀高浜弥五郎政綱にあてがわれたが、豊島女はの打ち渡しに対して城郭を構えて抵抗したとある。

⑦ 満城

満城は戸石港すぐ北側に位置している。比較的南北に長く伸びた独立丘陵部の頂上に主郭部があり、南側を堀切で防壁している。「どじょう会」様の資料によると、現在の戸石郵便局側が大手口、南側満城城地の先端付近が見張り所であった地点であろうとの事。現地では「海から敵が来た」というお話も残っている。



できるが、水本城、水本城よりも視界が悪いために、水本城の北東側及び山手の方を警戒しているように感じられた。またツク尾城の対面側には戸町氏が城主であったとされる鳥屋城が位置している。



③ 水本城



女神大橋より水本城(大久保山)を望む

水本城は現在の大久保山の山頂部に位置していたとされる。平坦部があるものの残念ながら遺構らしきものはまだ発見できていない。山頂部は木々繁茂のために視界不良であるが、中腹からは長崎港を広く見渡す事ができる。さらに戦国期に長崎氏と敵対した深堀氏側の動きも監視することができるともいえる。時期は不明であるが城主は戸町氏であったとされている。水本城の周囲には「ツク尾城」「鳥屋城」「水本城」が位置しており、在地領主であった戸町氏との関連が窺える。

④ 魚見岳台場跡

長崎台場は、江戸時代に中国・オランダに開かれていた長崎港を警備するための施設である。寛永18年(1641)、港口に西泊・戸町両番所が置かれ石火矢台が設けられた。承応3年(1654)には港口の7か所に築造され、これらは、のちに増築された台場に対して「古台場(または在来台場)」と呼ばれる。次いで、文化5年(1808)に長崎港内においてフェートン号事件が発生し、改めて長崎警備の強化が図られ、同年5か所に「新台場」が築かれる。これらの古台場から増台場までは幕府主導により築造された「公儀御台場」である。また、幕末になり再び外国船の出没が頻繁になると、長崎港警備の強化が図られ、長崎警備担当の佐賀藩は、長崎港外の佐賀藩領神ノ島や伊王島などに新たに台場を築いた。長崎台場は、記録上23か所が確認されており、このうち、次の3か所が国史跡となっている(長崎市HPより)。

一ノ台場、二ノ台場、三ノ台場が設けられており、見事な石垣が残っている。一ノ台場には弾薬を保管する「御石蔵」が残っており、一見してコンクリートの建物かと思えうほどに精巧な作りとなっている。



⑤ 倭石城



倭石城はフレスが深堀裏手の城山頂上部に位置している。城主は深堀氏であり、室町時代に築城されたものとされる。深堀氏はもともと上総国の御家人であったが、建長7

年(1255年)肥前国戸八浦(現在の長崎市街地南部から野母半島西部にかけての地域)の地頭職となって当地を支配した。深堀氏は絶えず周辺領主の長崎氏や戸町氏らと対立抗争を起しており、戦国時代には「深堀純賢」が「長崎甚左衛門純景」に度々攻撃をしかけている。

倭石城は東西約300m、南北最大幅約100mと広大な広場を有する城郭であり、周囲には高さ約1.5mの石塁が築かれている。石塁の内側には空堀が築かれており、今でも陶器片や石臼がゴロゴロと転がっている。石塁にはところどころ入口部が設けられていたり、石塁の内側から外敵を射撃するための窪みがみられる。城郭北東部の石塁は一層高く積まれており、櫓台のような高まりとなっている。さらに城郭南西部には複数の空堀が並んで「畝状空堀群」が設けられており、緩い斜面からの侵入を警戒している。

⑥ 深堀陣屋跡

深堀氏の館跡であったと伝わる。深堀氏はもともと上総国深堀(千葉県)の出身である。建長7年(1255年)に深堀能仲が当地の地頭となり治めた。周辺には「御屋敷」や「馬場」等の地名が残っている。



⑦ 菩提寺

倭石城の山麓部にあり、深堀氏代々の菩提寺である。佐賀藩家老深堀鍋島家累代の墓や、深堀義士らの墓がある。鍋島家の墓の奥に「深堀純賢」の物と伝わる石塔が祀られている。

福田・柿泊・手熊地区

永禄8年(1565年)福田浦の戦い



福田・柿泊・手熊地区の歴史は非常に古く、平安時代の治承4年(1180年)に「平包守」という人物が彼杵荘生手・手隈兩村(現在の手熊地区か)の領主として任ぜられている。その後平包守の子孫は「福田氏」と名乗り、南北朝～戦国期にかけて当地区にて活躍した。

① 福田城

福田氏の居城とされ、築城期は天正期(1573～1592)かと思われる。「大村郷村記」には「此の城水ノ手なし築ク時代不知」とある。非常にシンプルな形状の城館であり、頂上部に櫓台があり、主曲輪に稲荷神社が鎮座している。頂上部から山麓へ2つの尾根筋が伸びており、先端部には丸がある。南東方面の丸は「だんとんさま」とも呼ばれ、古い墓が祀られている。言い伝えによると、この付近は源平の昔、戦いのあった場所で幾多の戦死者があり、これを葬ったという。現在の崎山先端は古墳であったとされ、無縁塔が祀られている。「だんとんさま」の墓の下には温石で造った石棺が露出しているとの事。北東側の丸については墓から探索する事ができ、石積を伴う段差構造が多数見られる。大手門付近には昔、堀切の跡もあったとの事だが現在は不明(稲荷神社入口部?)。頂上部には櫓台が設けられており、案内板が設置されている。

永禄年間(1558～1570年)、新たに南蛮貿易港となった福田港を「平戸松浦氏」の松浦隆信らが襲うが、福田領主「福田左京亮兼次」と宣教師らはそれらの上陸を防いだ(福田浦の戦い)。



⑧ 高浜城

高浜ダムのすぐ隣に位置しており、山麓からは真っ直ぐに軍艦島を眺める事ができる。「大村郷村記」には「その昔三浦公の築いた城跡として石垣が所々に残る。また大堀・小堀という地名が残る」とあるとの事。三浦公とは深堀氏の事であり、城主は深堀高浜氏であったと考えられる。南北朝時代、北朝方についた「(深堀)高浜亦五郎政綱」は鎮西管領一色範氏より、戸石村田八町等を買ったが、その土地は矢上渡良民部三郎入道妻の豊島氏のものであった。そのため矢上空閑氏はその打ち渡しに強く抵抗した。

高浜城は南側の尾根筋を三重の堀切と土塁で、北側を畝状堅堀(堅堀を複数構築して攻撃側の移動を阻む)と虎口を設けて防壁している。頂上部や各々の曲輪は狭いために居住的な役割よりも、領土の境界を見張る強力な砦跡であったものと思われる。築城期は戦国時代かと思われる。



天正期頃の勢力分布図



元亀2年の長崎開港以後、長崎港を巡って周辺領主は様々な動きを見せていた。深堀領主の「深堀純賢」は度々長崎領主「長崎甚左衛門純景」や「長崎六丁町」を攻撃する。長崎甚左衛門純景は城下を焼き払われるなど苦境に立ちながらも、大村純忠や神浦、福田、三重地区の領主らの援兵により撃退する。謙早、高来、島原半島北部の領主であった西郷純亮は深堀純賢らとともに大村純忠や長崎氏、古賀氏らを攻撃した。その後天正末期になると佐賀の「龍造寺隆信」の勢力が強大となり、大村氏、西郷氏をはじめほとんどの領主はその傘下に入った。

② 福田大番所跡

福田大番所は福田城のあった山の麓、福田港に臨んだ一角に設けられていた近世大村藩の番所であった。江戸幕府は異国船の来航とそれに伴う外国人宣教師の入国を厳しく取り締まる必要性から、大村藩に対しても、その外海に面する外海筋に対して番所を設けて備えるように命じた。寛永13年(1636)、幕府の命を受けた大村藩主大村純信は、大村領戸町、福田、三重、神浦、瀬戸、中浦、面高の7か所に番所を設置させた。このうち福田には長崎に近く重要な地であるとの理由から、5年後の同18年にはこれを拡充して大番所とし、他を小番所として区別した。

なお「大村郷村記」によれば、それより早く、戦国時代の元亀年間(1570～1573)にはすでに大村氏はこの地に番所を設けていたという。琴海舞島城の城主の子孫であるという「相川藤左衛門」が一時期大番所を警備していた。

③ 丸木館跡

築城年代は定かではないが福田氏の館とされており、永禄8年(1565)横瀬浦が壊滅したのは南蛮貿易の拠点となり、元亀元年(1570)頃に長崎港が開港して南蛮貿易の拠点が移るまで繁栄した。現在は密集した宅地になっており遺構は残存しないが、一部道路に面して「石積跡」とされている一部が残っている。付近に井戸がある。

港町風情があり、茂木と雰囲気似る。永禄8年(1565)福田開港の年、貿易の利権を巡り平戸松浦氏の松浦隆信が兵船を派遣して港を襲おうとして失敗したが、福田氏の活躍もあったものと思われる。また、大村純忠は娘の1人が福田氏の妻となっているため、純忠が福田氏をいかに重視していたかがよくわかる。

④ 邪宗門頭

天満宮下の畑地は古寺の跡で、大正5年頃の県道道路工事前には橋の老樹があり、ここに寺の門があったのを土地の人は「ジャシュモン」とか「ジャンシュモンガシラ」と呼んでいたという。邪宗門頭とはキリシタン宗門のことで、又の名を大音寺跡ともいわれている。

⑤ 福田天満宮

福田城とは尾根つながりの場所であり、関連が窺える場所に位置している。港方面が良く見え、また比較的傾斜が強いので要害を成している。福田城同様漆の監視を行うためには適切な位置にある。天満宮には「草津の碑」という天文6年(1547)の碑がある。



↓手熊・柿泊地区探索マップ



①宮尾城・キリシタン墓

宮尾城は天正14年(1586)に福田忠兼によって築かれたといわれている。遺構は丘陵の頂上部に位置し、主郭は台形状の比較的広い曲輪である。南東側の尾根筋を鉤型に折れる堀切で分枝している。当日は「NPO法人21世紀夢倶楽部」代表鈴木律男様の案内による探索。どじょう会様の資料によると頂上主郭部に2つの井戸跡があったとの事で、実際に一つ凹部を確認。もう1か所は水道タンク?になっている。主郭部にはアンテナが建っているために遺構は破壊されているが、発掘調査が行われているとの事。南東側の堀切と土塁は明瞭に残っており所々石積も見られる。



宮尾城麓に位置している。温石で造られた2つの石棺があり、片方の石棺には十字架を立てていたという小穴が彫られていた。このキリシタン墓は福田忠兼の父で福田氏17代「福田兼次」夫妻のものである。

永禄8年(1565)、福田兼次は太田純忠の命により、ポルトガル船との貿易港として福浦を開港するとともにキリシタンの洗礼を受けた(洗礼名:ジョウテン)。キリシタン墓周辺の地名を「ジョウテン」と呼んでいるのは、この洗礼名「ジョウテン」の名残とされている。ちなみに福田村郷土史には「平家の武将だった者の墓だと伝えられており、墓を粗雑にすると罰が当たると教えられ、これまで長年大切に祀ってきた」とある。福田氏は元々「平姓」であるため、関連が窺える。



②館山(手熊館屋敷)



手熊館屋敷とも呼ばれ、「大村郷村記」によると「手熊浦の柿泊西の方海辺人家の上にあり、今は畑にて地形不詳、西北の方海に臨み、少しの山にて絶壁なり」とあり、また「元禄記」には、「上段十四間四方、下段長さ三十間、天正十四年福田大和守忠兼取立て、今は畑地なりと言う。」とある。「福田村郷土史」によると手熊屋敷跡は当時の領主であった福田氏18代福田忠兼(1586)がよく休憩していたところとも言えられ、それがためにその屋敷前入り江を「館の浦」あるいは「殿の前(とのさき)」と言い、また屋敷裏一帯については「殿の後(うしろ)」とも呼んでいるとのこと。実際に登ってみると、頂上付近には畑地の名残かと思われる段々畑の石積が見られる。頂上部の周囲はぐるりと石積みが囲っており、南西部側には土塁のような高まりが続いている。また頂上から北側の海を見渡せる場所には2つの階台らしき高まりが見られるがなぜ2つあるのか、用途不明。南東部には虎口様の石垣が見られるが、後世のものか?館山は全体がほぼ断崖絶壁に覆われており、尾根筋以外からの攻めはほぼ不可能。外海側にもろに面する立地であるために、舟の往来や海からの敵に対する監視の役割を果たしていたことは確かと思われる。現在の柿泊港は埋め立てであるため、かつてはその辺りに船を停泊させて、有事の際には速やかに行動できるようにしていたのではないかと感じられた。

③下のどん ④上のどん

下のどんは手熊浦を一望できる場所にある。福田氏19代「福田兼親」夫妻の祀り墓とされるが、詳細は不明。さらさらと「上のどん」が祀られている。上のどんは地元の方には「どん(殿)の墓」と言い伝えられている。手熊浦や宮尾城、館山や舞岳城を広く見渡す事ができる。位置的に舞岳城の尾根筋先端にあたるため、関連が窺える。舞岳城は元々福田氏の一族である「檀氏」によるものとされている。この檀氏は戦国末期に大村純忠に叛き、三重において福田氏18代福田忠兼に打ち取られた。その後舞岳城は福田氏に与えられた。福田氏遠祖の墓ではないかとされている。



神浦地区

神浦地区には嘉歴4年(1329年)に「神浦源次」と名前が見え、永和年間(1375~79年)には神浦城主「大車(神浦)小次郎俊長」が領主であったという。遺構としては「神浦城」の他に、平安時代末からの歴史を持つ「鷹ノ巣石鍋製作所跡」がある。



①神浦城

永和年間(1375~79年)に在地領主の大車(神浦)小次郎俊長が築いたとされる。神浦氏は時津氏らとともに「丹治比氏」の一族であるとされるが、戦国時代になると大村純忠に従った。永禄9年(1566年)に武雄の後藤賢明とともに大村氏を裏切ったが、天正期(1580~)には純忠の命を受けて長崎基左衛門純景を助けている。神浦城跡は発掘調査が行われ公園化している。主郭部はほぼ台形型であり、尾根筋側を1本の堀切で遮断している。南側主郭部には柱穴群がみられるために何かしらの構築物があった可能性が高い。15~16世紀の所産である陶磁器が多く発掘され、また石塔も出土している。



光照寺

神浦城の山麓に位置する光照寺には、領主の墓守として現在地に転じたという寺伝があるとの事。神浦氏の居館跡であったとされている。寺域内には神浦氏第11代正通、正通の三男長通、正通の孫高茂の3基の墓跡が残っている。長通は大村藩主大村純長に近侍して寵愛を受けたとの事で、墓碑には「大村十郎兵衛丹治長通」と大村姓で記載されている。また字に「丹治」も記載があり、前述「丹治比氏」との関連が窺える。



②大城 ③田中城

大城は断崖絶壁の城山山頂に築かれている。現在は城山展望台が設置されており、非常に眺望が良い。山頂部は巨石が散乱しており建造物は建てられそうにない。山麓部は畑地の跡なのか段々構造が見られる。田中城は下黒崎町、日浦病院の裏手に位置しており、石積が見られるものの比高が低く、山城というより館跡や陣跡のように感じられる。大村郷村記によると「田中城と佐賀藩大城との間で戦いがあり、大城方が敗れて南の海に網を下ろし、それをつたって逃げた」とされている。中世における三重や外海は深堀氏、大村氏、長崎氏らの飛び地が複雑に点在しており跡が絶えなかったものと思われる。



天正12年(1585)沖田暲の戦いで能造寺隆信が敗死した後、「アフォンソ・デルセナ神父」の記録によると「天正14年(1586)、大村殿は決してこれらの地を見捨てようとはしなかった。彼(大村純忠)はついに有馬氏が支配する内海(長与村等?)と外海(神浦?)の城を攻めた。無血裡とはいかなかったが、大した難儀もなく、彼はこの地を回復した」とあり、能造寺氏の脅威が去った後大村純忠が旧領奪還に動いている事がわかる。また天正8年(1580)、深堀純賢と西郷純賢に挟撃された長崎基左衛門純景への援軍として「田中兄弟」の名前があるが、田中城との関連は不明(大村純忠家臣の「一瀬宗正」は元々田中姓であり前記の合戦に参加した際、一瀬口で功を立てた事から一瀬姓を賜ったとの事)。

④鷹ノ巣石鍋製作所



西彼杵半島には蛇紋岩帯の周辺に滑石岩脈が発達している。滑石製石鍋は平安時代末から中世の西日本に広く流通した厨房具である。水田生産が乏しい土地の住民にとって石鍋生産と輸送を担うことは生活の糧を得るための産業となっていた可能性が高い。

当時は石鍋4つが牛1頭と同じ価値であるといわれ、とても価値があったので探掘は一大事業であった。ここで削り取った程度形を整え、作業場で細かく加工して出荷。その製品を瀬戸の家船(えぶね)と呼ばれる船上に暮らす人々が小舟で運び、大きな船に乗せて輸送していた。

製作所跡には数百年も昔のノミ跡や採掘跡がまだに岩盤に残っている。また加工途中の石鍋が今なお転がっている。

琴海地区

2025年1月19日(日)、形上地区まちづくり協議会の皆様、地区の方々と一緒に「琴海舞岳城」の探索を行いました。実際に現地の方々と櫓台、土壘、石壘、主郭部を確認した後、舞岳城周辺の石塔類や寺社仏閣等の探索を行いました。

琴海舞岳城



第-8 舞岳城跡
長崎県教育委員会編集(2011)
「長崎県中近世城郭跡分布調査報告書」

琴海舞岳城は形上地区、ニュー琴海病院の北西部山頂に位置している。地元の方々によって大切に守られており、遺構の状態も良く手すりも設置されているので安全に探索することができる。

主郭部は楕円形の平坦部となっており、頂上には櫓台とみられる高まりがあり毘沙門天が祀られている。主郭部北東側は細長く伸びており見張り所として機能していたか。主郭部西側は土壘と石積、帯曲輪が構築され、山側からの攻撃に備えている。舞岳城が位置しているあたりの地名は「シロ」「城の平」「城の辻」と呼ばれており、古くから城郭として認知されていたことがわかる。「シロ」の南東側には「タチ」という地名が見え、館跡であった事が推測できる。「大村郷村記」によると舞岳城の城主は「相川氏」であったとされ、かつて舞岳城城主「

相川知仙」と「喜々津主殿」が合戦したという。相川氏については：西海市西彼町平原郷「相川家」の祖である「相川助解由左衛門尉義武」は、朝鮮出兵に従軍後、大村喜前の縁故で形上に住み、2代目の藤左衛門の時に平原に移住した。長崎開港後、異国船警固のために福田大番所が設けられ、藤左衛門が番所役人となった。喜々津氏については：現在の喜々津、多良見町に「金谷城」「かのう城」等の中世山城が残っており、喜々津氏が城主であったとされている。喜々津氏系図によれば、初期の「喜々津伊豆守」は、大村清前(大村純忠の養父)に仕えて喜々津村を与えられ、同村に住居したという。天正年間(1573~1592)、大村純忠に対して喜々津村、矢上村、深堀村、戸町村、高浜村、野母村、五カ村の地頭等が反旗をひるがえして、敵方であった「能造寺隆信」に属したと伝わる。



第-8 舞岳城跡
長崎県教育委員会編集(2011)
「長崎県中近世城郭跡分布調査報告書」

山城を守る・攻める際には山頂部へと至る尾根筋道が積極的に利用されたと考えられる。そのため山城の尾根筋には堀切や土壘等、防御遺構が構築されている場合が多い。琴海舞岳城北側~北西側の尾根筋にも防御遺構が構築されており、山側からの攻撃に備えていた事が分かる。尾根筋①は主郭部櫓台のすぐ後方に延びており、位置的に重要であったため堀切が築かれている。尾根筋②については主郭部に近づくにつれて傾斜が大きくなる上に露岩が多く、そのままでも十分険阻であるため堀切等の防御遺構は構築されていない。尾根筋③は見張り所とされている場所から山麓へ伸びているが、比較的登りやすいために堀切と石積を設けて防御遺構としている。また堀切は石積で補強されていた。尾根筋道が歩きやすいために、古くはこちらも登山道として用いられていたのではないかと想像する



琴海舞岳城山麓では五輪塔残欠が出土しており、基礎部には何やら文字が彫られている。解説が今後の課題。

六丁町探索

～長崎開港とともに建設された城塞都市～

六丁町とは

元亀元年(1576年)、新たに長崎の地を領国に組み込んだ戦国大名大村純忠と、イエズス会の宣教師との間で、長崎湾を福江浦に代わる南東貿易港とする協定が結ばれた。その翌年から南東貿易船が入港することとなり、長崎のうち長崎港に面した坪の一角に六丁町が建設されることとなった。町建ての経緯については長崎町、イエズス会側の記録で良い面もあるが、病床に伏す大村純忠に代わり家臣の「聯長対馬守」がイエズス会と協力しながら町建てを行なったとされる。坪の教会周辺には、大村純忠による「大村町」、島原の有馬義純(義貞?)による「島原町」、日浦与左衛門による「平戸町」、横瀬与五左衛門らによる「横瀬浦町」、「外浦町」、



平戸屋文知坊なる人物を乙名とする「文治町」合計6つの町が建てられた。その中には平戸、博多、山口等他地からの亡命者も多く流入している。戦国末期、深堀氏や西郷氏からの度重なる攻撃に備え、町内には堀と櫓が築かれ要塞化されていた。大村町、島原町には常時守備兵が置かれていたとあり、有馬義貞は川口の地(現在の油屋町周辺)に「川口屋敷」を構えて逗留する事もあった。なお、長崎の在り地領主であった長崎藩左衛門純景はこの町割りに参画する事は出来ていないが、六丁町と同様に深堀氏や西郷氏、古賀氏の攻撃を度々受けた。また、六丁町の頭人の一人である「馬場基兵衛」は長崎藩左衛門純景の従弟とされており、関係性が窺える。

① 泉芳跡地



元亀2年(1571年)長崎が開港されるよりも前には森崎神社があったと記述する文献もある。長崎開港後は同地に小さな教会(サン・パウロ教会堂)が建てられたとされている。その後豊臣秀吉の禁教政策の影響で断絶があるものの、幾度かの立て直しや増改築工事を経て、文禄2年(1593年)の再建の翌年にはイエズス会本部などの関連施設の総称である「坪の教会」がこの地に形成された。慶長19年のキリシタン禁制によって破壊された後、その地は糸割符宿老会所が設けられるが、その後火災もあり、長崎奉行所を経て西役所として利用されていく。発掘調査の結果、遺物は国産陶磁器、東南アジア産陶器、中国産陶磁器、瓦、金属製品、ガラス製品などであり、出土した瓦の中には立山役所で出土した瓦と同じ紋様を持つものがある。また、キリスト教関連の遺物である「花十字文瓦」も数例出土した。坪の教会にはイエズス会の墓地もあったとの事で、その場所はイエズス会管区長館とコレジオの側にあつたとされる。

② 南蛮船来航の波止場



元亀2年(1571)、ポルトガル船とポルトガル人がチャーターした唐船の合計2隻が初めて長崎港に入港した。以後もポルトガル船は毎年のように来航し、長崎は国際貿易都市として急速に発展していった。当時、ここは長い坪の先端部分で、波止場があった。天正10年(1582)、伊東マンショ、千々石ミゲル、中浦ジュリアン、原マルチノ、4人の天正少年使節がローマに向けて出航したのも、慶長19年(1614)、高山右近や内藤如安らキリシタンがマニラやマカオに追放されたのも、すべてこの波止場だった(案内板より)。

③④⑤ 一の堀、二の堀、三の堀



一の堀は現在の長崎地方務局隣、喧嘩坂やミゼルコルディア本部跡の位置する坂道にその名残がある。天正期(1570年代頃)、長崎六丁町は西郷純亮や深堀純賢ら敵対勢力からしばしば攻撃を受けていた。それらへの対策としてキリシタン達は、六丁町の外側に木の柵と堀を設けて防御を固めたという。その後豊臣秀吉が長崎を天領とした後、文禄元年(1592)に長崎奉行所が置かれ、その南北に「外堀」「内堀」が築かれ、一の堀とされた。一の堀の周囲は道路が少し盛り上がり、一説によると堀を埋めた際の名残なのでは?との事。二の堀は旧長崎町役所の南側と長崎商工会議所の通り、三の堀は桜町小学校の西側周辺にあった。両堀とも名残が見られる。

⑥ サント・ドミンゴ教会資料館



資料館内では発掘調査時における井戸や礎石跡等の遺構をそのまま見ることができ、多数の「花十字紋瓦」といった教会時代の出土遺物、それに続く末次屋敷・高木屋敷時代の出土遺物を見ることが出来る。また発掘調査によると、教会石壘の下層からは瓦や陶磁器、さらに下層からは建物柱穴や土坑などが確認されており、教会の建立以前に何かしら建物が築かれていた可能性が高く、何かしら利用されていたものと思われる。

ながさき山城・砦 探検魅力発信塾

塾長	山喜 邦次				
1	藤原 久郎	21		41	
2	稗圃 健史	22		42	
3	山口 雄二	23		43	
4	平柳 道子	24		44	
5	川添 美知子	25		45	
6	福田 浩一	26		46	
7	島田 博志	27		47	
8	山口 忠彦	28		48	
9	藤瀬 光子	29		49	
10	山口 優子	30		50	
11	永田 勇太郎	31		51	
12	田中 初季	32		52	
13	川島 健市	33		53	
14	石丸 京子	34		54	
15	楠 麻衣子	35		55	
16		36		56	
17		37		57	
18		38		58	
19		39		59	
20		40		事務局員	中央総合事務所 総務課 本田 航貴